

Bunka なう

変わる世界の言語② 地域で違う手話

筑波技術大学障害者高等教育
研究支援センター准教授

大杉 豊

2000人余りの聴覚障害のある学生が在籍する筑波技術大学では、入学して初めて手話に接し、キャンパスライフを通して手話を習得する学生が約半数である。

そもそも手話は聴覚障害児を対象とする学校教育の場で生まれ、先輩や同級生など、たてよこに交わる集団生活の中で育まれてきたコミュニケーション手段である。明治11(1878)年、京都に設立されたろう学校で教育に用いられてから、日本手話は約130年の歴史を持つとされ、現在も多くの聴覚障害者が日常生活においてコミュニケーションや思考の手段として使用している、かけがえのない言語である。

音声言語が万国共通ではないのと同様に、身ぶり言語である手話も万国共通ではない。「ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業」でマレーシアから来日した、自国の手話のネーティブ(母語話者)であるチャン・コック・シエンクさんは日本の手話をまったく理解できなかったという。同じく聴覚障害者を持ちyanmar手話のネーティブであるイー・ティンザイ・トゥンさんとともに約120時間、3カ月にわたる語学研修を経て、ようやく日常会話に不自由しなくなった。

日本手話では親指を立てて「男」、小指を立てて「女」と

表現する。マレーシアとmyanmarの手話での表現は、写真でわかるように、手の形、手の位置、手の動きすべての面で異なっている。これら三つの要素が音声言語における「音素」「音韻」「形態素」という基本単位に相当するという認識が、1960年代に始まった手話の言語

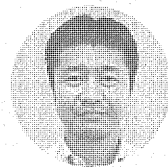
学研究の基礎となっている。手話は身ぶり・しぐさから発した言語であり、「男」「女」の手の形、手の位置、手の動きすべての面で異なる手話表現を例にとりてみる。日本手話ではこれらの概念を表すときに一般的に使われる身ぶりを単語として取り入れている。一方、myanmar手話は「男」が口ひげ、「女」が垂れる

る前髪と、それぞれの特徴を一本指で表現している。マレーシア手話は歴史的に影響を受けたアメリカ手話での表現の仕方がそのまま使われている。

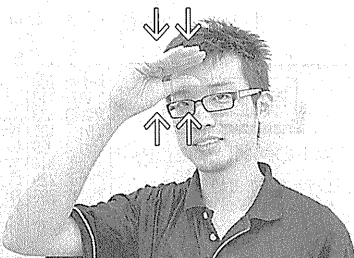
命令文など文型を示すマーカー(標識)もそれぞれの地域の身ぶりやしぐさをもとに発展している。ティンザイさんは日本手

ろう者の文化映す財産

おおすぎ ゆたか 1962年生まれ。米国ロチェスター大学大学院言語研究科で博士号取得。00年に全日本聾啞(ろうあ)連盟本部事務所長。07年から現職。30語について各都道府県で使われる手話表現を地図と動画で紹介(<http://www.a-tsukub.a-tech.ac.jp/ge/osuaji/smap>)。

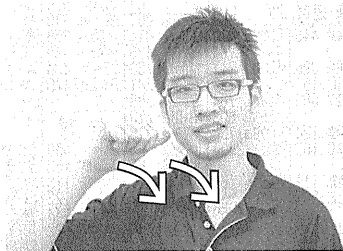


マレーシア



額の前で手指を2回合わせる

男



親指で頬の下を2回なぞる

女

ミャンマー



鼻の下に一本指をあてる



眉の上に一本指をあてる

筆者撮影

第20回国際歴史言語学会(25~30日、大阪府吹田市の国立民族学博物館)の国際ワークショップ「手話の歴史言語学—データベースの構築と一般歴史言語学における展開を目指して」(28日)、国際シンポジウム「アジア・太平洋地域諸言語の歴史研究の方法—日本語の起源は解明できるのか」(30日)は一般公開。無料。申し込み必要。詳しくは(<http://www.minpaku.ac.jp/research/pr/20110725-30.html>)。

話を学習するなかで、myanmar手話の疑問文を示すときの下あごを上にあげるマーカーが抜けてきらずに、苦心したようだ。それは音声言語でいえば、英語を話すときに日本語の文法をそのままあてはめてしまう、という間違いと似ている。10カ月の日本研修を終えたコックさんとティンザイさんは、自国以外の手話を習得したことで「目の前が一気に広がった。自国の手話にも歴史と文化がある。大切にしていきたい」と語って帰国した。手話も音声言語と同様に多様性に富む言語であり、そして各地域に形成される手話使用者の社会「ろう者コミュニティ」の文化的な財産であること、これを私たちはとくに学校教育の場で、言語的人権を保障する観点からも強く意識していく必要がある。